

---

# 闇の鍵

M3

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

闇の鍵

### 【著者名】

ZZマーク

N4366Y

### 【作者名】

M3

### 【あらすじ】

皆さまのアンケート集計結果、多かった『青の祓魔師、未来編！！』執筆開始！！20歳となつた燐達の成長を、しかとその目で見てみろ！

## 序章（前書き）

20歳をむかえた燐含むかつての祓魔塾の仲間達、任務で忙しなかつた彼らだが…  
…1つの鍵が、正十字学園に危機を及ぼし、この鍵が再び…彼らを引き合わせた…!!

## 序章

人間と悪魔の血を引く少年・奥村燐の前に突然、父親である魔神サタンが現れた。

魔神サタンが自分の力を継ぐ燐を連れ去りつとした際、燐の養父・藤本獅郎は燐を守つて命を落とす。

燐は祓魔師になつて、仇であり父である魔神サタンを倒すため、祓魔師である弟・雪男の指導の下、祓魔塾で志を共とする友人達と訓練を積んできた。

あれから10年……

かつて祓魔訓練生として悪魔祓い（エクソジズム）を学び始めた  
候補生エクソジアへも無事昇格して、祓魔師の道を地道に上がってきた燐達は

## 序章（後書き）

皆さま！

アンケートにご協力ありがとうございましたーー！  
青工ク、挑んでみます さあ、あたたかい目と心でじ覽下さーー！

## 10年越しの彼ら

「奥村先生！」

「？！」

正十字学園・祓魔塾 祓魔師を志す者は、この塾に通い、祓魔訓練生ペイジとして悪魔祓い（エクソジズム）の学び、祓魔師としてのノウハウを仲間と共に叩き込んでいく。

生徒に呼び止められ振り向いたのは、奥村雪男……正十字学園歴代最年少で祓魔師の資格を取得した秀才だ。

「はい。なんでしょうか.」

「えりと……遅れていた提出物を出したくて……」

「はい、提出締め切りは出来るだけ守つて貰おうね」

「はい、はい……すいません……」

「クス……よのじ。受け取つまへよ」

ヒン……

「相変わらずかっこいいよね 奥村先生！」

「二十歳だよー? 若いのに落ち着きがあるってさ~」

「優しいーーーーー ゆねー」「

「あたし奥村先生の悪魔薬学大好き! 分かりやすいもん

「…………そりこえーば… 奥村先生って双子のお兄さんいるんですね。」

「性格全く似てない感じよ?」

「けど……祓魔師としての腕は… 確かだつて」

「だつて……

“名<sup>キヤンサー</sup>騎士”の称号持つんでしょ？ 燐先生……………

「はあ……終わった……お腹休み、ビリで食べよつかな……あれ？？」  
お弁当……」

「いたいたー！ 雪男ー！」

「？…況さん…」

「お前弁当忘れつてつたろ」

雪男の前に現れたのは 奥村燐。

悪魔と人間のハーフだ。父・魔神サタンの血を濃く受け継いだ燐は、養父の藤本獅郎から預かつた降魔剣を抜くことで、悪魔の力を解放する。

10年経ち、現在の奥村燐は、祓魔師の称号の一つ、“名誉騎士キヤンサー”を取得し、かつて養父だった藤本獅郎の称号…“聖騎士パラディン”を目指すと共に、仇である父・魔神サタンを倒すべく…現在も祓魔師として磨きをかけている。

とはい…10年経た今、昔のせつかちをや、“青い炎”的コントロールの不安定さも抜け、『学園一のナイト（騎士）』

と謳われるほどにまで成長を遂げた。

弟の雪男も、燐が候補生エクスワイヤの頃は、講師を担当し面倒を見ていたが、キャンサー名誉騎士となつた兄を背に、誇らしくも…現在“上一級祓魔師”の称号の自分に、満足感を得られてはいなかつた…

「『』めん…。なんか今朝バタバタしちゃつてさ…」

「珍しいな。いつも時間に余裕のあるお前が」

「テスト作らなきやいけなくて…。寝不足だよ」

「受け持つてる学問多いもんな。俺はほとんど実技で済ましたまつてるから」

「またそりやつて樂する…。たまにはペーパーテストつていつのも生徒には大切なんだから」

「へいへい、いつかな…」

『いつか?』

「やういえばまた髪伸びたね…なんかうわつたそりだよ?…後ろなんて肩過ぎたりやつてんじやん。切つたら?」

「ああ…切りに行く暇なくてさー。けど、この祓魔師のステッキや」のぐらこの髪の長さの方があつてね?」

「兄さんだけだよ…そんな斬バラ頭似合つてんの…」

「おいなんだと…。お前は変わり映えしねえな~奥村雪男くん。15歳の時とほとんど変わっておらんね~。ん?」

「ム。……人間変わらないのが一番さ。それに、僕は背が高い。」

「うつー一八〇〇がよへ書つり加へ」

「185だよ。それは兄さんの身長だろ」

「変わんねーよ」

「悪いが5? も違つ

「うるせー眼鏡！コンタクトにでもしてみやつてんだー！」

「『ハタクトはめんじゅく』なんだよ。兄ちゃん、その髪を少しでも整えたらモテる感じがない？」

「はい、残念だな。雪男.. 今の俺は、もはやお前よりモテんだよ.. ! 今時の女子は、お前みたいな小食男子の真面目メガネキャラより、肉食男子の悪魔キャラの俺の方がキュン ときめきもんなんだな~ これが」

『悪魔キャラってこいつか悪魔じやん.....』

「はあ.. わかったわかった。とにかく、お弁当を食べやせりよ.....?  
?~兄さん、何は?」

「もつ食つた。これからしゃみの店に行くんだ」

「しゃみの店?... あ。じゃあつこでに買い物頼んでいいかな?  
?」

「おひる」

「じゃあこれメモね。しえみさんによろしく

### 祓魔用品店『フツマヤ』

祓魔師が使用する薬物の原料・植物その他様々取り扱っているお店だ。ここのお店を任されているのが杜山しえみという女性だ。燐や雪男と同い年で、燐とは、共に祓魔塾に入り学んできた同期でもある。

候補生時代から悪魔薬学などの薬品植物にくわしく、現在は、手騎士ティマー・医工騎士ドクターの称号を持つ中一級祓魔師である。

「しえみ、いるか？」

「？…り、燐…いりつしゃー」

「店に籠もりっぱなしか？身体に良くなーザ」

「う…うん……でも、あと少しで屍系の魔障の毒に効く速効性の薬  
が出来そうだから…」

「やつか。相変わらずすばーな！」

「う…うん…凄いのは燐の方だよ…ヤンナー騎士取得したんだから」

「俺は悪魔の力のおまけ付きだけどな」

「そんなことない。あんなに…悩んで…苦しみで…向か合ってきた

力を、上手く使こなせるようになつたんだから、燐の努力の賜物  
でしょ。」

「ありがとな」

「／＼／＼えへへ。え…えつと…な、なにか、お買い物？」

「？！やべ…目的忘れるといだつたわ。えつと、羊歯・牛爪・椒2  
つずつと…B濃度の聖水1リットルとアロエ2切れ。あ・これ袋分  
けてくれるか？」

「はい。少しお待ち下さい。」

「？！」

『IJKの分配……』

「IJKにこましたかー。奥村くん」

「……やっぱメフィストか」

メフィスト・フュレス。正十字学園の理事長であり、祓魔塾の塾長である。燐や雪男の養父、藤本獅郎の友人であり彼の死後は、燐や雪男の後見人の役割を果たしてくれた。魔神サタンの息子である燐を、今までうまく手を回しここまで持ち上げてくれたのもメフィストだ。しかし、彼自身の詳細は一切公に出さないため、燐は、感謝している反面……腹の中が読めないメフィストに胡散臭さを感じている。

「いやあ～探しました。」

「なんだ？」

「あとでお話しますので、理事長陣までお願ひします

「任務か？」

「ええ。まあね～」

『ホント胡散臭せえ……』

「あんたから直接依頼とは……イヤな予感だな」

「ええ……ちょっと厄介です。なので、今回は少しだめの班パーティで挑んで頂きます」

「…………わかった。」

「パーティのメンバーはすでに私の部屋にいます…………では」

『上一級祓魔師が……多数のパーティと任務?……だけ厄介なんだよ……つたく、メフィストのヤロウ』

「 燐、 お待たせ。 はい」

「サンキューしえみ。これ、お代な!」

京より来たり

理事長室

「入るぜ」

「兄さんも呼ばれたのか」

「雪野」

「久しぶりやな~奥村くん」

「?...」

「名騎士なんて凄いな。いつか(京)まで尊滞つと/oruで」

「志摩!子猫丸!」

「…………お前も呼ばれたんか」

「？！……お前まで来てたとはな……勝田っ？」

「なんで疑問形やねん！！」

「いや……髪がや……」

「あはははーほれ坊ーこつたやうー髪あるしたら絶対奥村くん氣付  
けへんてー！」

「氣合入った鶏冠<sup>トリノミ</sup>へアー、保つといた方が…えかつたんぢゃいまつ  
か？」

「やかましいわー廉造ー子猫丸までなんやねんーええ歳して、髪持  
ち上げとんのもカッ「悪いやろ」

「相変わらずクソ真面目だな」

「ふんっー。袈裟には髪おろした方がええ思つたんや」

「和尚おつをまだろーおつわまーー！」

「奥村……お前…バカにしとるやひ…」

勝呂竜士。当時、燐とともに祓魔塾に入学した時は、京都の仏門一派・明陀宗の若頭だったが、現在は父・達磨の意志を継ぐ、明陀宗の頭首であり、座主血統の勝呂竜士として京を守護している上一級仏教系祓魔師だ。詠唱騎士アリアと童騎士ドラグーンを取得している。

志摩廉造・三輪子猫丸。廉造は、志摩家末っ子・子猫丸は三輪家当主だ。2人ともまだ若いが、幼い頃から若頭である竜士の側にいたため、現在は頭の竜士の権限により、竜士の側近であり、廉造は京都出張所祓魔師一番隊隊長を。子猫丸は、三輪家当主と、京都出張所深部一番隊隊長の任されている。2人とも上一級祓魔師であり、廉造は騎士ナイト・詠唱騎士アリアの称号を取得。子猫丸は医工騎士ドクター・詠唱騎士アリアの称号を取得した。

「しかし、ホントに久しぶりだな。元気にしてたか？」

「まあまあですわ。やつと、廃れてた寺の信頼を取り戻してきたんやから」

「坊のおかげですね。」

「へえ～仕事してんだな～お前

「大きなお世話やー俺はおとんがやり遂げられなかつた」とをやつ  
とるだけや

「じつしかし、志摩も子猫丸も変わんねーな！勝呂が変わつたら余計  
変わらなく見えるな…」

「確かに…僕は変わつてへんかもな。けど、志摩くんは四男の金造はんそつくり思こません?」

「あー似てるー似てるわー髪伸びて余計に

「やめてーーやめてーー金造ひみで金兄はやめてーー

「志摩くん、祓魔師一番隊隊長任命されはつたんやから…柔造はんみたく髪黒染めて、切れぼええのに。柔造はんみたくモテますよ?」

「それだけは堪忍

「咲さん、お揃いですか？」

「おせーた。メフィスター」

「だから奥村くん……仮にも理事長に向かってね……  
「京都からわざわざ勝田達まで呼びやがって、どんなだけ厄介な依頼  
なんだ？」

「…………分かりました。では、話しまじょうか

「事の発端は、一週間前、私は“中級以上”の屍グールの抹殺をお願いしました。」

「？」

「理事長……あなたの結界がある限り、学園に中級以上レベルの悪魔の侵入を許すはずがない」

「はい。その通りです。雪男くん……しかし、いたのです。中級以上のグールが」

「それで、そのグールを殺れってか？」

「いえ。グールはネイガウス先生が処理しました」

「…………問題はその後つてわけか」

「その後、ネイガウス先生からこの“鍵”を受け取りました」

「鍵？」

「倒したグールの腹の中から出てきたらしいです」

「…俺達（上級祓魔師）でも見たことねー鍵だな」

「その通り。どこに繋がる鍵か分からない」

「？！理事長…あなたにもですか？」

「わたしは学園だけにのみならず、あらゆる所に繋がる様々な鍵を扱っていますが、見たことありませんね」

「俺達に、この鍵を調べろ……ちゅうじですか？」

「中級以上のグールの侵入も気になります。そこと並行して調査して下さい」

「中級以上のグールの召喚なんて、並の祓魔師では出来ませんな…坊」

「ああ…だから俺達も呼ばれたんか」

「ひとつと解決したいんでね。長くパーティーを組んできたあなた

方でしたら、早急に片付けてくれやつでしたので」

「俺はええで」

「俺は坊を援護するだナアですわ」

「僕もです」

「勝町が乗るなら、俺もやるぜ」

「兄さんが何かやらかさなによつて、僕も承ります」

「おー」

「鍵は渡しておきます。解決してくれぬなら、鍵はどうぞしてくれても構いません」

「分かった。」

「では、お願ひしますよ……」

「とは言つたものの、ビリからどう調べたらいいものか……」

「だな。いつそ鍵使つてドアあけてみつか?」

「そんな危険な橋渡れるかい!—」

「坊、まずは、その出てきたグールから情報もうた方がええんと  
ちやいまつか?」

「志摩…………あ。そやな。奥村、俺らはグールの線から調べる。

「分かつた。兄さん、僕達はネイガウス先生に少し話を聞いてこよ  
う」

「そうだな!」

「奥村、鍵はお前が持つとけ」

「え？！俺なの？」

「奥村くん、一応この中じゅう一番上の称号持つてはる……」

「悪魔に一番耐性あるから、ござとなつても大丈夫やわ～」

「う・」

「兄ちゃん、落とさなきでよ」

「わ、わかってらー」

「ほな、俺らは行くで。なんか分かったら連絡するわ」

「分かつた」

調査？

「……やな……例のグールが最後に滅却されたんは

謎の鍵と、中級以上の悪魔の出現の真相を調べることになり、勝呂竜士・志摩廉造・三輪子猫丸の3人はグールの線から調べることにした。やってきたのは学園の裏にある森林への入口の側。グールが倒された場所だ

「…………坊。」

「…………ああ……かすかやけど、『うつう臭うで』

「グールの大きさが分かりますな～」

「これだけハツキリ臭い分かるなり、もしかしたら“あの時”が見えるかもしねへんな……子猫丸。」

「……やつてみます」

子猫丸はグールが倒された箇所であるひづれす黒い血痕の後の中心に立ち詠唱を始めた。

宴の後よ……世に還りん……土にかえり血肉骨とかす……汝の宴に我をよ  
べ……

「 「？」」

「坊！来ます！」

子猫丸達の目の前には倒されたグールと数々の祓魔師の姿があり、激しい戦闘がくり広げられていた。先頭をきつっていたのは上一級祓魔師イゴール・ネイガウス。中級以上のグールにネイガウスも最上級の屍番犬ナベリウスで受けて立っていた。

「？……坊！あれ見て下さい！」

「グールの奴、なんか……持つてはるで！」

「？！…………鍵か！！最初から奴の腹に入つとつたわけやなかつたんか……」

「と。こう」とは

「誰かがグール召喚して鍵盗みに行かせたんや」

そのとき、ネイガウスの屍番犬ナベリウスの一撃がグールを直撃する…するとグールはけたたましいうめき声と共に血と肉体を拡散し消滅していった。決着がついたようだ……消滅した後には、鍵が1つ落ち、ネイガウスが手に取る。

「坊」

「なんや廉造」

「あそ」、「下」

「？」

「坊！ぐ、グールの手が……う、動いてはる……」

「キモいな」

「あれ……手に鍵握つてんのとちやうか？」

「……………どうして逃げたグールの片手に持つてたんは確かに  
鍵やつた。じゃ、ネイガウス先生が拾つたあの鍵はなんや？」

「ね……ネイガウス先生が偽造したつちゅうわけは」

「ないやろ。いま俺らは一部始終見てて、そんな素振りなかつたし  
……ネイガウス先生自身、グール完全に消した思てはるから、千切  
れた片手の逃走にはおそらく気付いてへん。」

「考えられるとすれば……元々“鍵は2つ対”になつてたつちゅう」とか……」

「まあそつ考えてまず間違いないやろ。子猫丸の詠唱六十六章“去視”は正確無比。コレだけの痕跡からの過去の透視は確実や」

「戦つてたネイガウス先生は、グールが鍵持つてたことに気付いてへんみたいやつたしな〜。」

「次、どないします？坊。」

「ネイガウス先生のとこは奥村達がいる。まあ後で互いに情報交換といふか……次はあの鍵について調べてみよか」

「けど鍵持つてはるの奥村君ですよ？坊」

「知つとるわ！“2つ対の鍵”つつうのを徹底的に調べるでー。」

「坊～～～～～～～」の学園を往来するのに一体どれだけの鍵あると思つまゐの～～？」

「文句言つなやー志摩。行くで」

**調査？**

「ネイガウス先生」

「……奥村兄弟か？」

イゴール・ネイガウス燐達が祓魔塾生時代の元講師の上一級祓魔師だ。

「話には聞いている。一週間前のことについて聞きに来たのだろ？  
？」

「はい。情報が少なすぎますので」

「とはいへ、奴を倒した私自身……あの戦いには腑に落ちぬ点がいくつかあった」

「 「？」」

「一つは、やはり中級以上のグールの出没だが……もう一つ。奴から一切“攻撃を受けなかつた”ことだ」

「攻撃を受けなかつた？」

「正確には攻撃をされなかつたの方がいいか。中級以上のグールと分かつた時点で、最上級の屍番犬ナベリウスを召喚して戦つてしまつた……しかし、翌々考えてみたら、奴からの攻撃自体は一切なかつた」

「え。鍵つて誰が作ったのかわからぬーのが普通じゃねーの？」

「多くの鍵を扱う祓魔師だが……鍵の中には、いつ頃作られたのか・鍵を作った者が誰なのか 不明な鍵の方が多いときく。」

「先生から、こういった鍵について……なにか聞いたことがあります？」

「……ああ。それだ。……その鍵についても気になるな……」

「奴を倒した時出てきた鍵はこれでいいんだよな？」

「学園で使用する鍵のほとんどは理事長のメフィスト・フュレス卿が作ったと聞いたことがある」

『あいつ鍵まで作れんのかよ？』

「だが…鍵には古いねんきの入ったものもある。やつにいた鍵ほど…謎も多い…」

「…………ですね。理事長自身も、この鍵は見たことがない…と言つていました。」

「…………。今回の件で、少し鍵について興味が湧いた…………。私も少し調べてみよう。グールが持っていた節も気になる」

「ええ……それは構いませんが……」

「程々にした方が身のためだぜ。先生…………俺達はパーティーまで組まれて調べてんだ。…………あんま深いとここまで首突っ込むと…………死ぬぜ。」

「…………お前などに言われずとも。 奥村燐」

「…………ふん。今のは親切だぜ?…………行くぞ雪男。」

「……ああ。では先生、ありがとうございました」

「奥村」

「…………。」

「キャラ名誉騎士取得…おめでとう…」

「うん……確かにね。ネイガウス先生の話を整理するなら……出没したグール自体はただの囮だった可能性がある。」

「なんか結局……手掛かりもらつたようでもひりつてねーよなあ

.....

「……………」

「囮？」

「きっと召喚した犯人は……もつと別の大好きな何かを狙っていたといふことだ」

「それが……この鍵？」

「可能性はある。でも、ここは正十字学園……祓魔師が溢れかえるここで、いくら中級以上のグールを召喚したところで、やられる事は十分考えられたはずだ」

「グールなんかに大事な鍵は持たさねーってことか……鍵間違え

たんかな?！」

「んな訳ないだろ……きっと…その鍵、まだ何があるんだ。」

「誰が作ったもんかわからんねーらしいしな…。」

「…………？ー…………兄さん。少し、別行動とつてもいいかな…………」

「あ?一人ですか?構わぬーけど…………どこ行く気だよ」

「少し、ね。」

「…………俺は、メフィストのところに行くぜ。あいつ鍵作れんな  
ら、鍵について詳しいはずだからな」

「わかった。勝呂くんたちとも合わなきゃなんないから……たぶん、  
会うのは夜だ。」

「了解

「なあ～…ほん～。一体こいつまで調べたらええんですか～？」

「廉造。ちんたら言つなー対になつたる鍵について、徹底的に炙り出さんかい」

「坊。そういうても…対になつたる鍵だけで、200くらいいりますよ……」

「200調べたらええ。」

「曰い暮れますよ～」

「つたぐ。“忍耐”つちゅう言葉ないんか?ー」

「坊。志摩さんこ一番なに詠葉ですか」

「…………子猫さん？？」

「だつて、この学園の図書室…………なんか凶暴悪いねんもん。肩も凝つたわ」

「確かに……地下で風通らへんからな」

.....

「やあー奥村くん。私に話ですか

「ああ。鍵についてだ」

「ん~……と聞かれましてもね~私もあの鍵を見たのは初めてですか  
『5』

「あの鍵についてはいいんだ。それ“以外”的鍵について知りたい

「…………と、いいますと?」

「ネイガウスにきいた。この学園あらゆる場所に通じる鍵のほとんど  
どは、あんたは作ってるってな」

「ええ。全てではありますんがね……少なくとも、あなた方祓魔師  
に『えでいる鍵は、正真正銘…私が作ったものです。』

「なら、“あんたが持つ鍵”はどうだ？……あんたが作ったもの  
か？」

「…………。」

「…………。」

「…………ふう。そうですね…私が作ったものもあれば、“やつでない”ものも……」

「じゃ質問を変える。“やつでない鍵”は…どうやって手に入れた？」

「…………奥村くん…隨分と頼もしくなったものですね…」

「…………おこ…。」

「…………おこりやんと答へまわよ。…答へば……」

“生まれるのです”

「? !  
……な  
」

「生まれるのですよ。鍵は……」

「うま……れるって……」

「ある場所から……ある場所へ通ずる時、新たな鍵が生まれるので  
す」

「…………。」

「例えば、私が初めてあなたにあげた鍵を覚えていませんか?」

「……祓魔塾へ行くための鍵だったな」

「その通り。あれとて最初から形があつた訳ではありません。……私が塾を作り、扉を作ったことで塾へ通ずる鍵は完成する……あとは……完成した鍵の型をいくつか複製すればいいだけのはなしです。」

「……なるほどな。この学園建てたのはあんた自身……その扉分の鍵を完成させるのも、腐るだけ所持するのも当然つて訳か……。」

「あくまで、いくつが扉を作り鍵を持つてる私の持論ですがね」

「なんでもいい。…………じゃ……謎の鍵つてのは……そもそも何なんだ？」

「なんてことない。“向い側”の奴が作っちゃつた……それだけの話です」

「？！……学園に……通じる扉を……勝手に作ったってことか！」

「少ない」とはないですよ。…………なんせ、この学園には“サタンの息子”までいますからね……」

「…………。」

「しかし、私の結界があるために……扉と鍵は作れても、学園には足一歩踏み入れられませんがね 私は“作った向こう側”的通ずる扉の感知し、鍵を頂く……」

「……敵陣に乗り込んでまでか？」

「……それでもしなければ、ゲームの主導権といつもの手に入れられませんからね」

「……だんだん胡散臭い話になつてきやがつたよ……」

「これがまた楽しい」

「知るか……まあ鍵について大体のことはわかった。……どうもな

「 燐くん...」

「.....。」

「 向こう側で生まれた鍵” である限り、扉を開けてみないことは分かりませんよ」

「……………そうだな」

「氣をつけて下さーい。……………なんせ、 “何処へ通する” か分からない」

「……………」

“帰つて来れなくなる可能性”

も…頭に入れておくといい。」

ガチャン

「…………。」

「パンドラの箱ってわけか……。」

## 整理と結論

燐はメフィスト・フェレスから鍵について質問し終え、校内から出よつという所だった。窓の外はほんのり夕日が見える……

『そろそろあの3人と鉢合つとくか……』

燐がそう思ったのと同じくして、女子生徒何人かが燐を呼び止めた。

「燐先生！」

「？！」

「今大丈夫ですか？」

「おひ、少しだけな。びつした?」

「奥村雪男先生の悪魔薬学のテスト範囲を教えて頂きたくて先生探しているんですけど……見当たらなくて……燐先生、ご存知ないですか?」

「雪男?……わりいな……今は任務で出でるんだ。また何日かしたら、探してきいてみてくれるか?」

「そうですか……分かりました!燐先生、ありがとうございました!」

「テスト、頑張ってな！」

「は、はいー／＼／＼

『アハハ…雪男の奴ど』に行つた？』

.....

燐は、学園の少し離れにある、自分と弟・雪男と暮らす寮について。燐が祓魔塾生になつた頃から弟と共に暮らしている寮で、今ではすっかりもう一つの家だ。昔は同室だったが、大人になつた今部屋はもちろん別だ。本当は、寮自体も出ようと思った所だったが、住み心地に慣れてしまい…出費かけてまで寮を出る理由もなかつたため辞めることにした。

燐は寮のてっぺん、屋根まで登る……祓魔師スーツの内ポケットから一本の笛の出す。夕日の落ち掛ける空をさし、笛の音を響き渡らせた。

燐！  
！

「クロー！」

クロはケシト・シ猫又猫に憑依する悪魔だ。元々は燐の養父・藤本獅郎神父の使い魔マジカルだつたが、獅郎の死後、気持ちの行き場のないクロを引き取つたのが燐だ。

10年経ても、2人の友好は薄れることはなく、むしろ昔にも増して絆は深まっている。出会つた当初こそ“飼い猫”だつたが、今や立派な燐の“使い魔”だ

呼んだな？！燐！

「ああ、雪男を探してくれ。あいつ連絡一つ寄越さねえ上に、つながらねーからどうこいいるか分からん。急ぎだ。片つ端から探してくれ、クロ。」

わかった。見つけたらどうする？

「雪男を連れて、ここまで頼む。」

任せぬか！燃！

「わい、と。勝敗たれど今流すつか…」

「あれ？ 駄馬くん… おひぐんやなこですか」

「あいつ、用あるって1人でどうか行つちまこやがつた……今、ク  
ロに探をじてゐる」

「ほな、先に……情報交換しちゃいましょうか？坊……」

「……せやな。奥村、先俺らから言づわ。俺らはグールの倒れた場所  
で“去視”をやってみたんや」

「？！…………その場で起きたことを、その痕跡から呼び覚ますつづ  
やつか。」

「せや。子猫丸がその手の名手でな……その中級以上のグールつ  
うもんを見てみた。」

「…………で？」

「面白いものが見えたでえ」

「面白っこもの？」

「志摩くん、話割り込んだらあかんて」

「ズバリ！鍵は2つあつたんや」

「…………は？」

「パン

「いっただあああー！坊ー！な、なんで殴りますの？ー！」

「話路し過ぎやー・廉造黙つとナー・」

「……言わん！」いやない……」

「まあ、もつと詳しく述べと…ネイガウス先生とグールの戦闘の末  
出てきた…その、お前が持つたる鍵とは別に、もう一つ…鍵を見た  
んや」

「なに？！その鍵は…」

「残念ながら…倒したはずのグールの片腕が、鍵握つて消えてしま  
いよつた…」

「……片腕だけで、か？」

「 もや。」

「 キモイ…」

「ともかく…お前の持つといのちの鍵、本当にこいつになつとひらめくやうに」とや

「ネイガウス先生達は……まさかグールの片腕だけが、ひとつでに動いてどこか消えるとは考えなかつたよつですわ。」

「子猫さんの去視やつて、第三者から見て抜けたことなのかもし

れへんけど……

「ま、実際そりゃうな…………。俺達がネイガウスに話聞いた限り  
じゃ、あの人自身、グールとの戦闘にはいくつか腑に落ちなかつた  
としか言つてねーし」

「腑に落ちなかつたって……何がですか？」

「まず一つは……グールの出現と、もう一つが……グールからの攻撃が  
一切なかつたことらしい。」

「ほんまか?」

「ああ。だからネイガウスの攻撃で一発だつたらしいぜ」

「ただ鍵求めつて…訳やなもんですね…」

「じつこいつ」とやっ子猫さん

「だつて、鍵盗むだけやつたら目立つグール召喚せんと…その犯人自身がやつた方が絶対楽やし、効率的です」

「雪男と同じこと言つてるぜ、子猫丸。雪男も…鍵を盗むとは別に、何か別の目的があるんじゃないのかつて踏んでる」

「ひなねー……ひまわりの鍵しかあらへんな……」

「対になつてゐるもう一つの鍵は、相手に渡つてしまつてゐるからじょいがねーとして……残つたこいつ（鍵）でひまわりで出来るかだな」

「……どうか……扉開けてみます？坊……」

「…………。」

「志摩の言つとおつだぜ、勝呂。メフィストに、鍵について聞いてみたが……あいつも、結局は扉開けて見る方法しかないだろうとや」

「.....開けてみるか.....」

結局、扉を開けて見るのは翌朝に持ち越すこととなつた……日も暮れ、悪魔達の動きが活発化する中で、扉を開けるは危険だと判断したからであつた。

それよりも、燐はいまだ帰つて来ないクロを待つていた。雪男を探しに行かせたつきり、やはりまだ帰らない。勿論、雪男も。雪男のことだから、いざ何かあつても問題ないとは思いつつも、やはり心配だ……

りん！

燐がそう考えてた矢先、微かながら、遠くから声が聞こえた。

「？！」

燐！

「クロ！！」

ハツキリ見えてきた影は、雪男の探しに行かせた使い魔クロだった。

燐！ただいま！

「遅いぞクロ……雪男！」

「兄さん、『めん。遅くなつた

「全くだ。一体どこ行ってたんだ？」

「僕達の“家”に帰つてた

「?...修道院か」

「ああ...。」

「.....急にまた...なんで?」

「書庫で、鍵についてなんかいに書物はないか見てたんだ」

「書庫...なんてあったのか...」

「修道院の裏にね……父さんは聖騎士だったし、なんか力になりそつ  
な物があるかもって。」

「なるほどな……んでも？寒露じいだつたよ。」

「…………あつたよ、一つ、気になる文面がね。」

## 決断へ

「気になる文面？」

「先に言つと、『闇へと繋がる鍵』があるらしい……」

「？」

雪男と燐はひとまず寮の中に入り、修道院にある聖騎士、藤本獅郎の書庫で雪男が調べてきた成果を聞くことになった。

「なんだそりや。」

「上級祓魔師のみに扱えられる鍵の書物に書いてあつたんだ。鍵は、扉により時点と目的地が繋がれて初めて誕生する」

「それはメフィストも言つてたな。あいつがこの聖十字学園や祓魔塾とか作る際に、扉を造つたことによつて同時に鍵も生まれてきたつて。」

「そり…………しかし、稀に、“失敗作”があるらしい……」

「つ？！失敗作……」

「そり。つまり、うまく扉が繋がらなかつた場合口ひ。」

「なるほどな……失敗すると……鍵はどうなるんだ？」

「普通なら出来ない。何故なら鍵は、扉と扉が繋がれて初めて誕生するからだ。けど、例外が一つだけある」

「…………例外……。」

“虚無界”で鍵を造ったときだ

「へーー、どうしたの？」

「その書物によると……『古くから、虚無界ゲヘナで鍵を造ることはあまり考えられない。』とある。何故なら、虚無界の住人達は、物質界の僕達とは違つて、生物・無生物問わず様々な物質に憑依して僕達の生活に干渉出来るからだ。」

「扉や鍵なんてわざわざ作る必要はないわけだ」

「そう。けど僕達は違う。扉や鍵を使わなければ、あちら側の世界に干渉出来ない……だから僕達祓魔師は、鍵を大切にする。」

「虚無界の奴らが、物質界に繋がる扉と鍵作つたら失敗すんのか？」

「そうじゃない。扉と鍵を造つて、仮に失敗してしまつても……鍵は生まれてしまつんだ」

「なんだと？！んじゃ……失敗だとしたら……扉は、鍵は、“ビーム”繋がんだよ！」

「そこだ。」

「？！」

「僕は、今回の事件。そのことが大きく関わっていると思つてゐる」

「虚無界で造られた失敗作の……扉と鍵が、どこへ繋がるかが？」

「ああ……兄さんの持つてるその鍵は恐らく、虚無界で造られ失敗作。犯人は、どうく繋がるか分からぬ扉を開けて、“何か”をしようとしている。」

「…………けど、勝呂達は、鍵は2つ対になつてゐつて言つてたんだぜ？」

「2つ？」

「子猫丸の去視で見たんだと。倒したはずのグールの腕が、もう一つ鍵を持って消えていくのを……」

「鍵は……2つ……」

「実は……明日……勝呂達と、この鍵使って、扉開けてみつか。って話してた」

「？！き、危険だ！兄さん！」

「勿論、色々下準備はする。けど、メフィストも言ってたが……鍵である以上、対象物を開けてみなきやただの鍵でしかないだろ…………それ以上もそれ以下もない。鍵は開けるものだ。パンドラの箱だろうが、何だろうが、開けてみなきや……この事件は、前には進めねーと俺は思ってる」

「……相手の思つシボの可能性だつて……あるだろ。」

「……尻尾出してくれりや儲けもんだろ？」

「…………。」

「…………クス……それもそつだね……開けよう。扉を」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4366y/>

---

闇の鍵

2011年11月30日15時54分発行